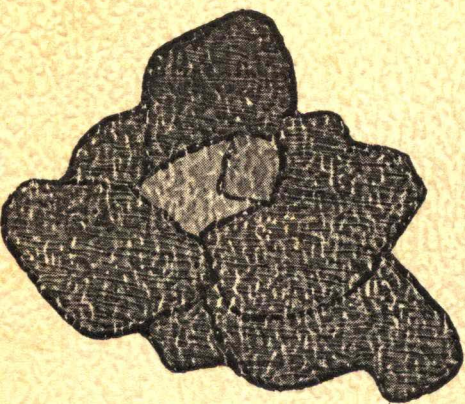




廿
八

9
友
い
日
々

田
山
友
一

恋しんのない日にち々

一九七〇年二月二十五日発行
一九七二年六月二〇日三刷

著者 田辺茂たなべもいち

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話東京(03)二六〇一一一一

振替東京八〇八

(株) 金羊社 新栄社製本
定価四五〇円



© 1970 Moichi Tanabe
Printed in Japan

乱丁、落丁本はお取替えます。

芯のない日々・目次

蝶か蓮華かはた垢か	七
芯のない日々	元
時計ばかりが	二
花は半開に	八
タキシード	一〇
窓辺の鳩	二九

青春コース

三毛

伊豆旅情

二毛

ひとかけの情事

一毛

熱海と三人の女

一毛

浜辺の丸太小屋

三二

おんなの明暗

三三

装 幀
熊谷 守 一
扉題字
田 辺 茂 一

芯のない日々

蝶か蓮華かはた垢か

(一)

学校出てから四十年

今じゃ本屋の大社長

銀座通いのつれづれに

できたおんなが五万人

(二)

学校でてから四十年

今じゃ本屋の大社長

銀座通いのつれづれに

ふられたおんなが五万人

それ!!

替歌ブームの昨今である。それに乗じ、私のさいきんは、こんな文句を、銀座の宵に唱っている。いや唱っているというよりも、ガナっていると言ったほうが適當である。

そのほか「もいちの季節」「もいちのタンゴ」「ひとり寝のもいち」など、数えあげると、二十にちかい。

それぞれみんな、自分自身で作った歌ではない。周囲にいるホステスや友人たちが、作っている。

ことし、六十余歳だが、考えてみると元気なものだ。

この元気は、いったいどこから来るのか、理由のほどは、自分自身にもわからない。恐らく単純な生活から来るものであろう。

私の自宅は、東京渋谷にあるが、朝、そこを出発し、新宿にある自分の関係する会社に到着し、夕刻は銀座にでかける。そして深夜或いは早曉、渋谷に戻ってくる。

なんのことはない、渋谷——新宿——銀座——渋谷間のコースだけである。

まことに狭い行動半径の日課である。

こういう行動半径の日常であるから、これと云った所産もあるわけではないが、ただそれを無性に繰り返しているだけだ。

だが私のような男でも、ときどきふつと思うことがある。

「俺はいったい何をしているのだろう」と……。

三年ばかり前のことだが、私は或る雑誌の対談で、大漢和辞典の著者である諸橋轍次先生に目にかかった。

対談を終えてから、私はこの長寿の先生にお願いした。

「何かいいお言葉があったら、お訓おしなえいただけませんか……」

私は由来、多少、天邪鬼あまのじごくのほうであるから、人生の戒訓とか、箴言しんげんとかいうものは、信じないほうの性質だが、そのときは、どういう弾みか、そういう言葉が、私の口から出た。

先生は領^{うなず}かれて、傍の小紙片に、ボールペンで、

「行不由徑」の四字を書いて下すった。こちらは素養がないから、すぐにはわからない。

あらためて、先生はそれを読んでくだすった。

「行くに小道に由^よらず」と云うのであった。

これを要するに、人生行路は、大道を歩いていけばいい。下手に、小道に寄り、道草を食ってはいけない、ということの意味である。

それを伺って、私は、私のような性格には、まことに恰好ない字句だと思った。

ゆっくり歩めば、いいのである。直線コースさえ、ゆっくり歩めば良いのである。そう思い、

そう私は観じた。

爾来「行不由徑」のこの四字は、私の頭の一部に、刻まれた。

銀座の酒場の吹溜まりのなかで、私は時折この文字にぶつかる。

新宿——銀座——渋谷、こういう行動半径の繰り返しは、果して私にとって、間違いない直

線コースなのであろうかと。

つまり自分自身に疑問符を投げるときがある。いや、ときがあるではない。私は何十回、何百回、それを繰り返したか知れない。

唄の文句にある通り、四十年通いつめて、得たものは、所産と云えば高々、女出入りぐらいのものであった。

無駄な費消であることは、誰の眼にも瞭然だ。道草じゃないか、と断定されても、致し方ない。だがしかし、その「だがしかし」という気持が私にはあるのである。

私は、自分自身の本性を一番よく知っている。私の本性を知っているものは、私を措いてははかにはない筈だ、と私は思っている。

とすれば、私の自分への診断こそ、ほんとの診断なのだ、と思うのが当然である。

過信と云う勿れ、剛情と云う勿れ、やはり私は、私という男を、一番よく知っているのである。そういう気持が、私をして「だがしかし」と私に云わせるのだ。

わけのわからぬことを、力調し過ぎる嫌いはあるが、私は、そういう意味で、私の現在を肯定している。

これが直線コースなのだ、と自分に云いきかせる。道草ごときではないのだ。

新宿——銀座——渋谷、このコースの単純さこそが、私を救っているのだ。

このひと筋の無念無想こそ、私の元気の源泉である。

いま私は元気を伴い、私の日常は、まことにリズムミカルなあけくれである。

単純にして、快き律動だ。

私は満足している。生命力^{ウィタリティ}だけが、取柄の男、私の一生は、そんなところで終始しそうだが、

本人がそれでいいと云うのだから、はたからは、何をか云わんやではないか。

どうも、イササカ居直っている向きもないではない。

毎度ながら、前口上に云い訳ばかり多いようであるが、さて銀座のはなしだが……。

これは二年ほど前のことだから、やや近況にちかいと云っていい。

そのころ私は、銀座裏、酒場「ラール」の客であった。と云っても、終戦後以来の馴染みの

店であつたが、私の酒場廻りのローテーションでは、月に一、二度、顔を出す程度であつた。目的の女性もいなかった。

私は季節感にうといほうで、それが夏だったか、秋だったか忘れたが、あるとき、私は私の友人のCから、旅に誘われた。

Cは、群馬と栃木の国境に、広大な山林を所有し、牧場や養魚場や温泉ホテルなども経営している。当然、その方面の道路開発などにも、多くの貢献をしている。

一度案内したいから、と云う話が、やっと具体化して、一泊旅行と成つたのである。

一行は、Cの友人である、親しいひとたちばかりで、二十人にちかかった。

社会的に知名度のある、総裁、社長、論説委員などの顔ぶれであつた。

当日は上野駅ホームに参集、それぞれグリーン車の切符を、そこで受けとつて、出かけた。

上越線を沼田駅下車、駅前に大型バスが待機していた。

バスに乗り込む駅前広場で、私は馴染みの酒場「ラール」の女将それにホステス、それに、暫くぶりに、池之端同朋町の姐さん連中の二、三とも顔を合わせた。

「そうだったのか……」と私は急に陽氣になった。黒一色だった列車風景が、転じてバスに乗り込むと、身邊に、突如、紅がさしてきたからである。

こんなにやく畑をよぎり、何やらの湖水の崖上を進む。自然の風光に、あまり関心のない私であつたが、それでも山林のみどりは、私の眼に沁みだした。

途中、異国風の情緒のある牧場等に小憩し、夕刻ちかく、山峡ふかいM温泉ホテルに到着した。風呂に浸かり、そのあと、広い応接間風の山荘の一室で、宴会が始まつた。

県知事などの歓迎の挨拶が終つてから、座は一段と碎け、賑やかになった。

ビュッフェスタイルの宴会だから、椅子はどの椅子に腰かけてもいいのである。

みんな時折の銀座裏で顔を合わせる顔見知りの連中ばかりであった。私も気が楽であった。

酔いが加わり浴衣の前をはだけて、踊りや歌などを唱った。終りちかくは、パンツ一枚で、キクボタシングの真似ごとまでも演じて、打ち興じた。

宴会がすむと、案内役が、ホテル経営者のせいもあって、客側は一人一室であった。

私も、部屋に戻ったが、無聊である。ひと風呂浸かるか、と私はタオルをさげて、大風呂にでかけた。

午前一時ちかい深夜であった。

広い浴槽であった。昼のときは気がつかなかったが、浴槽わきのガラス張りの水槽のなかには、色とりどりの大きな熱帯魚が泳いでいた。

前後したが、私とその浴室の扉を押して這入っていった途端、

「アラアラ、いやだわ！」

金切り声とも嬌声ともつかぬ二、三人の若いおんなの声がした。

白い体が、散るようにして、浴槽の向う側に移った。

みると「ラール」の、若いホステス達であった。向う側で距離はあったが一人だけすくくと起ち、タオルで前をおおっている。

彫像のように、いい体であった。

ほかの彼女たちは、湯に、没かしてしまったが、彼女一人が起っていた。

誇示したい気持もあるのであろう、と私は思った。
あわせて、四、五人の彼女たちであったが、ふと気がつくと、私のすぐ背後に、散らない白い体があった。

ほかの彼女たちは、逃げるようにして散ったのだが、彼女だけは散らなかったのである。
僅かなことだが、私は殊勝な奴だ、と思った。物わかりがいい。

「弓子さんだったかネ……」

私は声をかけた。

酒場で会っている程度であったから、名前を思い出すだけが、精いっぱいであった。

「そうです……」

利発そうな眼をあげて、彼女が私に云った。小柄で、背丈はないが、締っているいい身体だ。
肌に艶がある。

「お背中でもお流ししましょうか……」

彼女のほうからちかづいてきて、私に云った。

滅多にない所作である。感心に価する。

瞬間、私はそう思った。頭の回転と云ってもいい。

「ウムお願いしますよ、独りもので、あんまり洗って貰ったことがないからネ……」

私は冗談めかすようにして、そう答えた。

彼女が私の背中に廻った。

むろん、同僚の彼女たちは、浴槽のなかから、私たちの仕草をみているのである。